様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３０５

研究課題名（和文）女性知識人としてのイーディス・ウォートンの変容

研究課題名（英文）Trasformation of Edith Wharton as a Female Intellectual

研究代表者
佐々木　真理（Sasaki, Mari）

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：３０２９７４３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した女性作家イーディス・ウォートンの作品を中心にその思想と手法の変遷を検証することで、女性の知識人の社会的地位がどのように構築され、そして表象されてきたかについて明らかとした。具体的には、ウォートンに与えた同時代の女性知識人の影響について考察することで知性の表象にはジェンダーの問題が深く関わっていたことがわかった。次に、当時の反知性主義と教育について分析し、世紀転換期における社会の変容が女性の知性のあり方と自己表象に大きく変化をもたらし、その変容に対するウォートンの視点が、当時の女性作家にあって独自の視点であるという結論が得られた。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the way how the social position of female intellectuals was constructed and represented through examination of the thoughts and style of Edith Wharton, who was a distinguished woman writer from the latter half of the 19th century to the first half of the 20th century. By studying the influence of the female intellectuals on Wharton, I have elucidated the close connection between the representation of intellect and gender. In addition, through analysis of anti-intellectualism and education at that time, I have reached the conclusion that Wharton had a critical viewpoint about the change of representation of female intellect.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：女性作家　イーディス・ウォートン　女子教育　知性　知識人

１．研究開始当初の背景

アメリカ合衆国の女性文学研究においては、19 世紀半ばまでに確立された私的領域と公的領域というジェンダー化された区分が、白人中産階級の女性たちが執筆した、家庭における女性たちをヒロインとする、いわゆる「感傷小説」と称される一大文学ジャンルの創設につながり、それが 19 世紀後半に入ると、教育の普及や職業の創出による女性の公的領域への進出によって領域を越境しようとする女性たちの生き方を写実的に描くリアリズム文学へと変容し、20 世紀に入ってからは第１次世界大戦以降の新たな女性の生き方がモダニズム文学の女性作家を生み出していったとまとめられてきた。本研究の主たる対象であるイーディス・ウォートンはこのような従来の女性文学研究においては、職業作家から芸術家へ、感傷小説からリアリズム小説への転換期にあって苦悩した女性作家として位置づけられてきた。

本研究代表者は、イーディス・ウォートンの中期から後期にかけての作品及び旅行記の分析をこれまでに行ってきた。後期の代表作である *The Mother's Recompense*(1925)を扱った論文では、19 世紀の感傷小説家たちに対するウォートンの意識と、それら作家から自らを区別しようとする身振りに着目し、女性作家であること及び女性小説というジャンルに対するウォートンの確固とした批判意識を考察した。この時点で、改めてウォートンの文筆活動の変移を初期から見直したときに、ウォートンがその活動の初期においては、小説というよりはむしろイタリアの庭園や文化に関する著作さらには旅行記など、他分野にまたがる著作を発表していたにも関わらず、ある時期より小説に集中するようになったことに関心を抱くようになった。この期間は、ウォートンがそれまで身近であったニューヨークの上流社会の人々とは異なる、さまざまな分野で活躍する文化人や芸術家たちとの交友を広げ深めた時期でもあり、彼らから受ける影響の中で、ウォートンが自らのあり方、生き方、文章を書く目的、どのような分野を選ぶのか、という問いと対峙し、さまざまな実験と選択を行っていた時期でもあったのだといえるのではないだろうか。その時期にあっては、これまでは特にヘンリー・ジェイムズとの関わりが注目されてきたが、ヨーロッパにおける女性の知識人の影響を無視することもできない。それは、つまり、当時の女性たちを取り巻く知の形成とその表象の変容についても、ウォートンの研究にあたっては検証する必要があることを示している。以上のような問いかけから、ウォートンの経歴における、アメリカを舞台とする小説に集中するまでの特に初期に注目し、現在アメリカ文学史においてリアリズム小説家として位置づけられているウォートンの変容の軌跡を再検討するという本研究の着想にいたったのである。

２．研究の目的

上記の研究の学術的背景を受けて、本研究では以下の点について明らかにすることを目的としたい。第１に、ウォートンの初期作品におけるイタリアを題材とする旅行記、エッセイ、および小説において、ウォートンが強い影響を受け、その後親しい交友関係を築くようになった、ヨーロッパを代表する女性の知識人の著作と思想が、ウォートンの思想とその手法にどのように関わっていたのかを明らかとする。第 2 に、当時のアメリカ社会における知性とジェンダーの問題、および知性の形成を担う教育のあり方や教育に対する当時の思想がウォートンの作品にどのように反映しているのかを明らかとする。第 3 に、上記の 2 つの点を踏まえて、当時のアメリカ社会の変容がどのようにウォートンの作家としての自己形成、および作品の中の女性たちの表象に関わっているかを総合的

な視点から明らかとしたい。

３．研究の方法

研究目的を達成するために、本研究では関連する文献資料の入手及び分析と、それに基づく論考を草稿に執筆し学会誌への投稿及び学会での発表を行うという大きく二つの方法に基づいて、年次別に計画を進めていった。まず、平成２５年度は、イーディス・ウォートンの初期におけるイタリアを扱った著作に焦点をあてて、ヨーロッパを代表する女性の知識人であったヴァーノン・リーがウォートンに与えた影響の分析を行った。平成２６年度は、リーの影響についてさらに検証することで二人を結ぶ思想的背景に対する考察を深めると同時に、同時代の女性たちの知の形成と、消費社会へと変貌するアメリカの社会背景の関連について調査を行い、多角的な視点から、ウォートンの変容について研究した。平成２７年度は、ウォートンと同時代の女性作家たちの作品における女性像と、ウォートンの作品の女性像とを比較考察した。さらに、より深く考察を深めるために、ウォートンの作品における、語り手のジェンダーによる表現方法とテーマの相違について検証を試みた。

４．研究成果

本研究では、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍した女性作家イーディス･ウォートンの作品を中心にその思想と手法の変遷を検証することで、女性の知識人の社会的地位がどのように構築され、そして表象されてきたかについて明らかとした。

まず、ウォートンの初期作品におけるイタリアを題材とする旅行記、エッセイ、および小説に焦点を当て、ウォートンが交友関係を築くようになったヨーロッパを代表する女性知識人ヴァーノン・リーの代表的な作品と比較することで、独特の文章とスタイルでイタリアの歴史と文化を語るリーの手法と思想にウォートンがどのように感化されたかを分析した。その結果、リーの芸術観と美学が、ヨーロッパ文化に対するウォートンの評価を決定づけたことがわかった。また、リーが提唱する語りの技法を、ウォートンが具体的にその文章の中で実践していることを確認した。ウォートンは、中期の作品以降、リーのような知識人としてのあり方からは距離を取っていくこととなるが、そこには、伝統と文化に対する二人の認識の違いが大きくなっていったこと、また、世紀転換期における女性知識人に求められるあり方が変容していった経緯が関わっていたことがわかった。次に、ウォートンと同時代のアメリカの女性たちの知の形成とその表象について、当時の女性作家や女性活動家および教育に関する思想から考察した。その結果、ウォートンら女性作家たちは、その時代の反知性主義的風潮と女性らしさの規範に対する戦略を熟慮する必要があったこと、また、その作品においては、アメリカが大量消費社会へと変容していく中で、女性の消費する力が特化されていき、その力が知性の欠如と連動して表象されていることがわかった。そして、ウォートンの作品においては、知性の表象と、知性とジェンダーの関連性が独自の視点において分析され、それが世紀転換期における、女性と知性の関わりの変容に対するウォートン独自の批判であったという結論が得られた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

①<u>佐々木真理</u>
「ウォートンの女性たち――偶発的な親しさと断絶」『実践英文学』、査読有、第 68 号、2016、73-89

②<u>佐々木真理</u>
「1910 年代の女性たち――文学にみるジェンダーと消費」『アメリカ文学』、日本アメリ

カ文学会東京支部会報、査読有、2015、第 76 号、2-8

③Mari Sasaki
“Haunted by Italy and the Past: Edith Wharton and Vernon Lee.” 『実践女子大学文学部紀要』、査読有、第 56 集、2014、13-20

〔学会発表〕（計　2 件）
①　富山太佳夫、志渡岡理恵、佐々木真理、辻吉祥
「学校の内と外――イギリス、アメリカ、日本を比較して」　日本英文学会第 87 回全国大会ワークショップ、2015、立正大学

②　中垣恒太郎、柴田元幸、大和田俊之、佐々木真理
「表象文化から捉え直すアメリカ 1910 年代――文学・漫画・音楽・映画」　日本アメリカ文学会東京支部 12 月例会、2014、慶應義塾大学

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　真理（SASAKI, Mari）
実践女子大学文学部英文学科　准教授
研究者番号：30297436